

# 指導案・提案資料

## ① 指導案

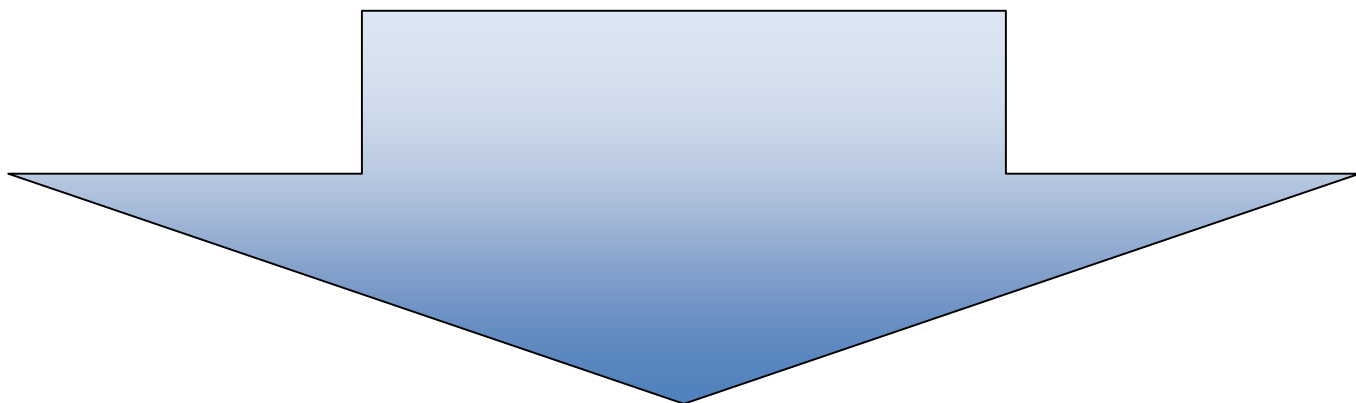
## ② 提案資料

※ 第100回教育研究発表会の紀要に掲載している指導案と、本実践に関わる提案資料です。

※ 提案資料は、指導案の補助的なものとして研究会当日に配布したものです。本提案資料は「教材の宝箱」版として、一部修正を加えています。

※ 本実践に関するご意見・ご質問につきましては、本校研究部までお願いします。

メールアドレス→[sakashokenkyu@ed.kagawa-u.ac.jp](mailto:sakashokenkyu@ed.kagawa-u.ac.jp)



## 第3学年西組 社会科学習指導案

学習指導者 滝井 康隆

### 1 単元 「海へ広がったまち ー坂出市の移り変わりー」

#### 2 単元について

##### (1) 育成したい「思考力」と学びに熱中する子どもの姿

###### 【育成したい「思考力」】

坂出市の移り変わりについて、時間的・空間的視野や立場を広げて得た事実を比較したり、相互に関係づけたりして、坂出市を発展させてきた取り組みの価値を捉える力

坂出市の移り変わりに興味をもち、今と昔を比べて、土地利用が変化してきたことやその理由について話し合う過程で、市の様子が時代によって変わってきたことや発展させてきた人の思いに気付き、これからの坂出市の姿について考えようとしている。

###### 【学びに熱中する子どもの姿】

坂出市では、江戸の終わりから明治にかけて、海を埋め立てて塩田が作られ、塩業が盛んになり、「塩の町」として発展する中で県下有数の長さをもつ商店街が形づくられた。その後、塩業技術の発達によって塩田が必要なくなり、広大な跡地には工場が誘致され、「工業の町」へと変貌を遂げている。このような坂出市の移り変わりについて、商店街の人の話や年表、写真等を基に調べていく。例えば、時間的・空間的視野を広げて今と昔の商店街周辺の様子、市内と海沿いの地域を比較することで、昔の商店街はたくさんの人でにぎわっていたこと、海沿いに広がる塩田で多くの人が働いていたこと、現在は海沿いに大工場があり、市内には住宅地が広がっていること等が分かる。さらに、商店街の人、市役所の人へと立場を広げて、土地利用の変化と人々の思いを関係づけることで、埋め立てや塩田跡地の再利用という取り組みが市の経済的な発展とともに、市民のよりよい生活につながっていることを捉えていく。

昔は海だったところが塩田になり、その塩田が工場や大型店舗に変化している等、市の移り変わりに興味をもち、昔の地図を基に「海が塩田になったよ」「広い塩田でたくさんの塩が作られ、港から全国へ運ばれたんだね」「でも今は、塩田はないよ」等と話し合い、昔の坂出市は塩業と港によって発展してきたが、現在は違うことに気付く。そして、現在の塩田跡地について調べ、工場と住宅地が分けられていることに気付き、そうなった理由を話し合うことで、坂出市の発展のために市役所の人たちが計画的に塩田跡地を再利用したことを明らかにする。そのように、土地利用の変化の理由を話し合い「市役所の人、坂出市の発展と市民のよりよい生活を目指していたのだな」等と思い気付けていく。さらに、商店街周辺で道路の拡張工事が進んでいる様子や、新しくマンションが建設されている様子等から、これまでの変遷を踏まえ、これからの坂出市の姿について自分なりの考えをもとうとしていく。

##### (2) 関心度を高め、新たな問題を共有する場を位置づけた単元構成について

質問紙調査の結果によると、本学級の子どもたちは、34名中31名が社会科が好きであると答えており、その理由として、見学や体験活動を挙げていた。一方で、年表や地図といった資料を読み取る活動が好きではないと答えた子どもは21名であった。これらのことから、見学ではなく、年表や地図といった資料を基に今と昔の違いを考えていく本単元では、関心度が低下することが想定される。

そこで、子どもたちにとって今と昔の違いが見えやすく、その理由に対する追求意欲が高まりやすい商店街の様子を窓口として学習を進めていく。「昔の商店街の方が、人がたくさんいるのはどうしてかな」「塩田があったからたくさんの方が生活していたのだな」と商店街周辺から坂出市の主要産業であった塩業に目を向けていく。そして坂出市は、「塩の町」とあるという認識を深めていく。しかし、日本有数の生産量を誇った塩田が現在は見られないことにずれを感じ、塩田跡地の再利用に対する関心が高まっていくと考える。さらに、土地利用の違いから市役所の人たちが計画的に町づくりを進めてきたことに気付き、塩田跡地が坂出市の発展のために道路や工場、大型店舗等に変化したことを明らかにしていく過

程で、「塩田跡地がたくさんあるのにさらに埋め立てたのはなぜかな」「なぜこんなところに長い緑地があるのかな」等の新たな問題を表出すると考える。このような問題を共有し、坂出市の発展とよりよい市民生活を目指したその当時の市長や市役所の人たちの思いを追究していく。このような学びを積み重ねることで、これからの坂出市の姿について「もっと生活しやすい町になってほしいな」等と、自分なりの考えをもととする子どもが育つと考える。

(3) 単元計画と学習意欲への働きかけ (総時数 11時間)

次	主な子どもの意識および学習の流れ	学習意欲への働きかけ
第一 次	<p>①② 坂出市の商店街の今と昔を比べよう</p> <p>今と昔の写真を比較して、昔の商店街の様子に興味をもつ。今よりも昔の方がたくさん人がいたことや多くのお店が商売をしていたことに気付き、「近くに住んでいる人が多かったのだろう」等とその理由について見通しをもつ。</p> <p>③④ なぜ、昔の坂出市商店街はにぎやかだったのだろう</p> <p>年表や写真、商店街の人から聞き取ったこと等を基に調べ、坂出市商店街の発展の背景には、塩業の存在があったことに気付き、追求意欲を高める。</p> <p>⑤⑥⑦ 坂出市の塩作りについて調べよう</p> <p>年表や昔の地図を使って坂出市の海沿いで江戸時代頃から入浜式塩田によって塩業が行われていたこと、広い塩田とたくさんの人によって、大量の塩を生産していたことを理解する。作られた塩は、鎌田勝太郎によって整備された港から全国へ輸送されていたことを理解し、商店街の発展と塩業や港との関係性を話し合い、港町として発展した坂出市について理解を深めていく。</p>	<p>①～⑩目</p> <p>【海へ広がる坂出年表】</p> <p>坂出市の年表を、西暦ではなく、江戸時代から始まる時代区分で大まかに示し、坂出市の変遷に関わる出来事を載せておく。そこに、それぞれの時代ごとの土地利用の様子を表した地図や昔の写真等を付け加えていくことで、視覚的に市の移り変わりを捉えられるようにする。</p>
第二 次	<p>⑧ 昔、塩田だったところは、どうなったのだろう</p> <p>現在の地図と塩業が盛んだっただころの地図を比べ、塩田が道路や大型店舗、工場等に変化したことに気付く。直線的な道路と、1学期に学習した市役所の働きとを結び付けることで、町が計画的につくられたことに気付き、番正辰雄市長や市役所の人たちの思いについて話し合う。そして、「塩田跡地がたくさんあるのにさらに埋め立てたのはなぜかな」「なぜ、こんなところに長い緑地があるのかな」等と新たな問題を表出する。</p>	<p>③～⑩目【簡単地図】</p> <p>坂出市全体ではなく、商店街や海沿い等、着目する地域を限定したり、昔の地図を分かりやすく表現し直したりすることで、今と昔や、地域ごとの土地利用の様子や違いを読み取りやすくし、解決の見通しをもてるようにする。</p>
第三 次	<p>⑨ なぜ、塩田跡地があるのに埋め立てをしたのだろう</p> <p>年表と地図から、塩田跡地の再開発と同時期に番の州地区を埋め立てた理由を話し合う。大工場等が計画的に造られたことから、市役所の人たちが塩業に変わる仕事を生み出し、坂出市を発展させようとしたことに気付く。</p> <p>⑩ なぜ、番正市長は緑地を造ったのだろう</p> <p>本時 (10/11)</p> <p>土地利用図を使って、緑地の長さに気付き、その役割について話し合う。坂出市の北から、工場、大型店舗、幹線道路と計画的に配置されていること、緑地より南には住宅地が広がっていることから、市民のよりよい生活のために町作りをしてきた市役所の人たちの思いを追究していく。</p>	<p>③～⑩目【人の思いカード】</p> <p>商店街の人や市役所の人等の思いを並べて掲示しておくことで、それぞれの思いの違いから、土地利用の違いの理由を考えられるようにする。</p> <p>----- 振り返り -----</p> <p>①～⑩【頑張りをはなカード】</p> <p>自分と班の友達の頑張りを振り返り、生活班での交流活動を3段階(◎○△)で評価した後、感じた疑問をカードに記述させ、話し合わせる。そうすることで、協働のよさに気付かせたり、次時への見通しをもたせたりする。</p>
第三 次	<p>⑪ これからの坂出市について考えよう</p> <p>商店街の再開発や道路の拡張工事等の写真から、市役所の人たちが坂出市をより住みやすくしようとしていることに気付き、これからの坂出市の姿について自分なりの考えをもつ。</p>	

### 3 本時の学習指導

#### (1) 目標

緩衝緑地が造られた理由を話し合うことで、坂出市の土地利用の様子が市民のよりよい生活のために変化してきたことを捉える。

#### (2) 学習指導過程

学 習 活 動	子 ども の 意 識
<p>1 前時を振り返り、本時の学習課題を確認する。</p> <p>関・自【海へ広がる坂出年表】 自【簡単地図】</p>	<p>市役所の人たちは、坂出市がお金をもうけることができるように塩田の跡地を工場や大きなお店や太い道路に変えていったのだな。</p> <p>緑地では働けないし、お金をもうけることができないのに、どうして造ったのかな。</p> <p>今と昔の地図を見比べてみると、緑地は塩田跡地を再利用して造られたものだね。番正市長がわざわざ造ったのだな。</p>
<p><b>なぜ、番正市長は緑地を造ったのだろう</b></p>	
<p>2 緩衝緑地が造られた理由について話し合う。</p> <p>(1) 個人で予想する。 自【簡単地図】</p> <p>(2) 班で話し合う。</p> <p>(3) 全体で話し合う。</p>	<p>みんなが休憩したり遊んだりできる場所を作ろうとしたのだろう。木を育てて売ろうとしたのかな。</p> <p>どちらも、この場所じゃなくてもよさそうだよ。この場所に、この長さで造られた理由がありそうだね。</p> <p>緑地よりも南側は住宅地で、北は工場や太い道路、大きなお店になっていて分かれているよ。緑も生活には必要だと思うよ。ここの土地が余っていたのではないかな。</p> <p>工場や道路の音や汚れた空気が住宅地まで届かないようにしているのかな。木があると音も防げるし空気もきれいになるね。</p> <p>番正市長は、緑地を造って、工場や道路の煙や音が住宅地に届かないようにして、市民の生活をよくしようとしたのだろう。</p>
<p>3 緩衝緑地が造られた理由を資料で検証し、坂出市が行ってきた取り組みの価値を捉える。</p> <p>関【人の思いカード】</p>	<p>緑地は、工場や太い道路から出る音や煙から、市民の生活を守るために造られたんだね。番正市長や市役所の人たちは、市民の生活をよりよいものにしようという思いがあったんだね。</p> <p>これは、商店街を作ってきた人たちの思いとは少し違うね。</p> <p>住んでいる人は、自分が生活しやすいところに家を作っていたよ。お店の人は商品が売れそうな道の両側にお店を出したよ。</p> <p>商店街は、通りの両側にお店ができていたね。お店の人がもうかりそうな所にどんどんお店を出していったけれど、塩田跡地ではそうならなかった。市役所の人がお金をもうけることばかりではなく、市民のよりよい生活を考えて計画を立てていたからだな。</p>
<p>4 本時を振り返り、次にしたいこと等を話し合う。</p> <p>振【頑張りをはてなカード】</p>	<p>自分の意見が言えたり、友達の意見も聞いて考えられたよ。市民の生活をよくするために、他にも取り組みをしたのかな。</p> <p>これから坂出市はどう変わっていくのかな。</p>

提案授業Ⅱ指導案  
二日目

### (3) 授業の詳細

#### 前時までの子どもの意識 学習活動1

子どもたちは、前時までには、塩田跡地が工場や太い道路、商業施設になり、さらに番の州を埋め立てて大工場を造ることで、坂出市を経済的に発展させようとした番正市長をはじめとする市役所の人々の思いを捉え、計画的に町づくりをしてきたことに気付いている。

まず、地図や年表から、緩衝緑地が番正市長によって塩田跡地に造られたものであることを確認するとともに自【海へ広がる坂出年表】、緑地は坂出市の経済的な発展とは関係がなさそうであるという見通しをもたせる。



【簡単地図】

自【簡単地図】さらに、塩田跡地がどのように再利用されたかを調べた際に表出された「なぜ、こんなところに長い緑地があるのだろう」という思いを想起させ、学習課題を設定する。

#### 学習活動2

まずは、個人で自由に予想する。緑地公園へ行った経験と結び付けたり、緑が多いことと前時の学習をつないで想像したりして、「緑がたくさんあるので市民が休憩できる場所を作ろうとした」「木を育てて売ろうとした」等と予想するだろう。

そこで、緩衝緑地の周りの様子に着目させ、緩衝緑地によって工場や幹線道路と住宅地が分けられていることに気付かせる。自【簡単地図】そうすることで、緩衝緑地がある理由を土地利用と関係づけて考えようとするだろう。これまでの学習を振り返り、工場や交通量の多い道路からは騒音や排気ガスが出ることと、緩衝緑地の存在を結び付けて考え、「住宅地に住む人々を煙や騒音から守ろうとしたのではないか」等と意見が出るだろう。

#### 学習活動3

緩衝緑地が作られた理由について意見が出たところで、番正市長をはじめとした市役所の人たちの思いについて想起させるとともに、緩衝緑地を造った市長の思いを検証資料として提示する。関【人の思いカード】そうすることで「坂出市の発展のために町づくりを計画していたな」「発展だけではなくて、市民の生活をよりよいものにしたいと考えていたのだと思うよ」等とその思いに迫っていくだろう。

その後、単元を通して学習している坂出市を発展させてきた人の思いを振り返らせ、番正市長や市役所の人たちの思いと、これまで学習してきた経済的な発展を願う商店街を造ってきた人の思いとは異なっていることに気付かせる。関【人の思いカード】それにより、自然発生的な商店街の成立のしかたと計画的な町づくりとの違いを押さえ、市役所の人たちが「すべての市民のよりよい生活のために」という思いをもって町づくりを主導してきたと、認識を深めていくだろう。

#### 学習活動4

自分と班の友達の頑張りを振り返り、カードに生活班での交流活動を3段階(◎○△)で評価させる。一方、次の時間にしたいことや疑問については授業中に記述させておく。それらを班で話し合わせる。振【頑張りをはてなカード】そうすることで、子どもたちは、現在の坂出市の姿を踏まえた、これからの市の変化に目を向けていくと考える。

### (4) 総括的評価

今と昔を比べながら、塩田跡地に緩衝緑地が作られた理由を話し合うことで、番正市長や市役所の人たちの思いに気づき、坂出市の土地利用が市民のよりよい生活のために変化してきたことを捉えている。  
【方法：発言、ノート】

香川大学教育学部附属坂出小学校  
第100回 教育研究発表会 提案資料

第3学年 社会科

# 海へ広がったまち —坂出市の移り変わり—



香川大学教育学部附属坂出小学校  
滝井 康隆

## 1 はじめに

本校が所在する香川県の坂出市という場所には長い歴史がある。子どもたちには、この坂出市の姿が時代ごとに様子が移り変わってきたことを捉え、その背景に町作りに関わってきた人々の思いが存在することに気づき、これから自分たちがどのように町と関わっていくのかについて考えをもってほしいと考えた。

3年生にとって、社会科は初めての教科である。生活科から発展し、自分たちの生活している周りの様子がどうなっているのかを実際に見ていくため、見学や体験によって社会的事象を実感的に理解していくことが多い。本学級の子どもたちは、坂出市を概観し、場所によって、「人が多いところ」「工場が多いところ」「田や畑が多いところ」に分けることができることに気づき、それぞれの場所について詳しく見てみたいという思いを高めていった。そして、学習するにつれ、「人が多いところ」には、家が集まっており、お店や公共施設も多く、販売に携わる人々によって自分たちの生活が便利になり、市役所で働く人の仕事が市民の生活を支えていることを理解していった。

3年生の社会科の学習においては、お店や農家・工場で働く人について学習することで、それらの人々の工夫や努力によって、自分たちの食べているものが作られたり、生活を豊かにする製品ができたりしていることを理解し、自分たちの生活が支えられていることに気付いていく。それぞれの部分を細かく見ていくことで、人々の生活の背景にある販売や生産、行政に携わる人々の働きが見えてくるのである。

しかし、常に子どもたちは、「どうしてこの場所に～があるのだろうか？」という疑問をもつだろう。なぜそこに工場が集まっているのか、なぜそこに田や畑が集まっているのか、なぜそこに家が集まっているのか、なぜそこに市役所があるのか、なぜそこにお店があるのか……。考え始めればすべてが疑問に思えてくる。これらの疑問を解決するのが、本単元、「坂出市の移り変わり」の学習であると考えた。

## 2 本単元で学習する内容について

本単元は、学習指導要領の目標（2）、内容（5）による。

目標（2）

地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。

内容（5）

地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。

本単元は、新学習指導要領の具現化を視野に入れた単元になっている。次期学習指導要領では、3年生の目標と内容は以下のように示されている。

目標（1）

身近な地域や市区町村の地理的環境、地域の安全を守るための諸活動や地域の産業と消費生活の様子、地域の様子の移り変わりについて、人々の生活との関連を踏まえて理解するとともに、調査活動、地図帳や各種の具体的資料を通して、必要な情報を調べまとめる技能を身に付けるようにする。

## 内容（４）

市の様子の移り変わりについて、学習の問題を追究・解決する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

(ア) 市や人々の生活の様子は、時間の経過に伴い、移り変わってきたことを理解すること。

(イ) 聞き取り調査をしたり地図などの資料で調べたりして、年表などにまとめること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア) 交通や公共施設、土地利用や人口、生活の道具などの時期による違いに着目して、市や人々の生活の様子を捉え、それらの変化を考え、表現すること。

学習指導要領では、「人々の生活の変化」や「地域の様子の移り変わり」ということばで示されている。どちらも、昔から今にかけて、何がどのように変わったのかを見るということである。従来では、それが道具に特化されており、洗濯に使う道具や米炊きに使う道具を取り扱い、それらの変化を通して人々の生活の変化を見ていくものであった。具体物によって学習するため、子どもたちにとって見えやすく、理解しやすいものであった。

しかし、1，2学期に、自分たちの地域の様子について学習してきた子どもたちにとって、道具の学習は、地域の様子と関係付けにくい場合があった。3年生のはじめから、自分たちの住んでいる市について学習してきた子どもたちにとって、今までの学習とのつながりを感じにくいまま、授業が進んでいくことになりはしないだろうか。このような3年生の社会科学習を、一年間を通して子どもたちの意識がつながるものにしていきたいと考えた。そこで、市の様子を概観し、それぞれの場所について学習を進めていく中で出てくる疑問、「なぜそこに～があるのだろうか？」という思いを解決するべく、市の移り変わりを学習するようにした。

本単元では、昔から今にかけての坂出の土地利用の変化を中心に市の様子の移り変わりを見ていく。その際、これまでに学習してきた、市役所の働きや販売・生産に携わる人々の学習等が活かされるようにしていきたいと考えた。

### 3 移り変わりの理解のために

#### ① 比較・類別，関係づけの思考

昔と今を比較しながら考えなければ移り変わりを理解することは難しい。そこで、本単元では、昔から存在し子どもに近い存在として、商店街を取り上げる。子どもたちは、これまでの生活経験上、商店街を通ったり、そこで買い物をしたりしたことがある。そのときに、「お店がたくさんあるけど、ほとんどが閉まっている」や、「道が狭く、古い建物がたくさんある」等、さまざまな感想を抱いている。この商店街を導入で扱うことで、坂出の土地がどのように使われていたのか、なぜそこに存在する（した）のか、今と昔を比較しながら坂出市の移り変わりについて意欲的に考えていくことができると考える。

本校社会科では、育成したい「思考力」を以下のように設定している。

a 社会的事象について、自己の既有経験に基づく事実や時間的・空間的視野や立場を広げて得た事実を、比較・類別して特色を捉えたり、関係づけて意味や価値を捉えたりする力

b aで捉えた意味や価値を再構成する力

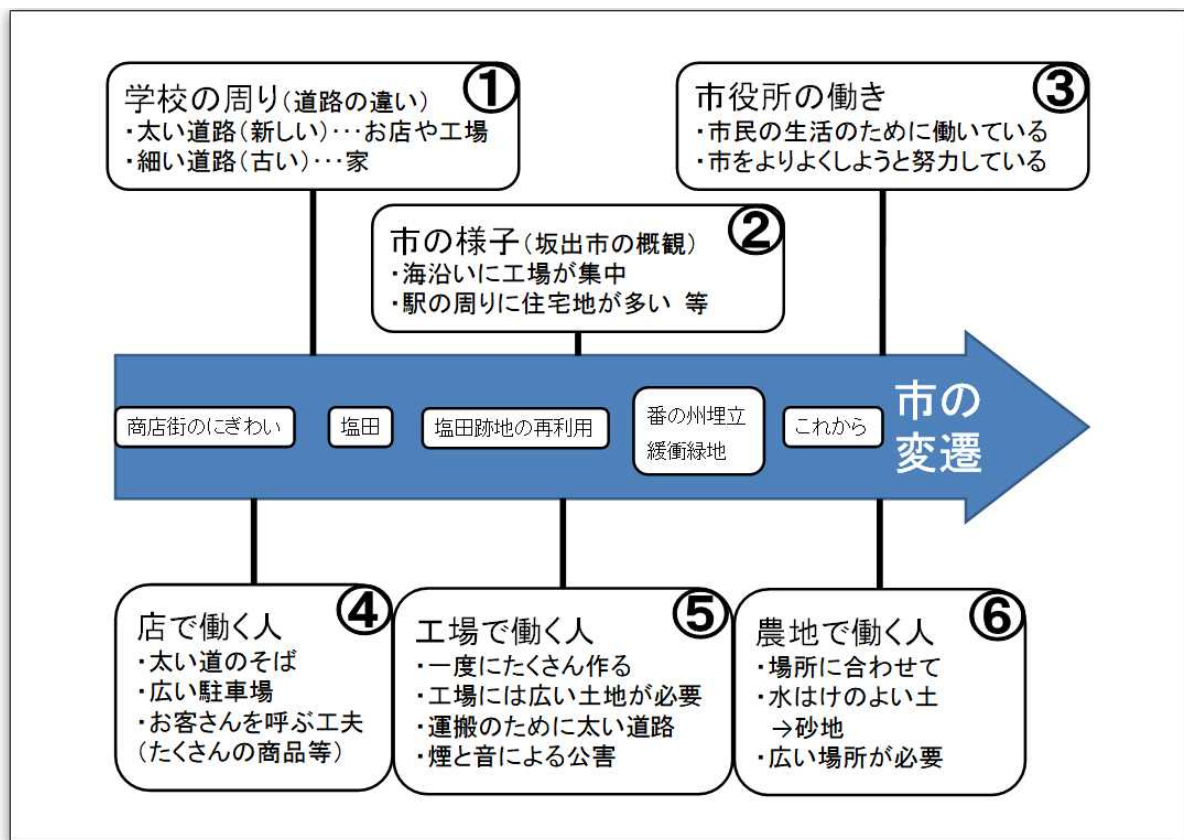
本単元においては、aの比較・類別思考と関係づけることを中心として、単元で育成したい「思考力」を以下のように設定した。



坂出市の移り変わりについて、時間的・空間的視野や立場を広げて得た事実を比較したり、相互に関係づけたりして、坂出市を発展させてきた取り組みの価値を捉える力

比較・類別したり、関係づけたりするためには事実を認識しておく必要がある。しかし、本單元の中で、すべての内容を学習し、事実認識を育てていくことは難しい。単元の導入で商店街を取り上げても、まず、「商店街」というものがどういう存在であるのかを学習しなければならない。そこで、商店街については「お店」の単元で学習しておく。その際、「なぜたくさんのお客さんが来るのか」「お客さんはどんな願いをもっているのか」を学習しておくことで、近年は一度にたくさんの商品を買うことができ、車で行くことができるスーパーマーケットに便利さを感じているお客さんが多いことを認識する。その認識を基に、現在商店街にお客さんが少ない理由を考えていくことができるだろう。

このように考えると、本單元は、3年生が今まで学習してきたことと、昔のことについて比較・類別、関係づけながら、坂出市の移り変わりについて学習していく單元であるといえる。以下に、これまでの学習と本単元のつながりを示す。



【これまでに学習した単元と本単元のつながり】

#### 4 単元で扱う教材について

商店街の今と昔の様子の違いから、子どもたちは「昔の商店街がにぎやかだったのはなぜか」と問いをもち、その要因として、「塩田」と「港」について調べていく。「塩の町」「港町」として栄えた坂出と現在の坂出市の様子が違っていることから、「それらの場所がどのように変化していったのか」を考え、海へと土地を広げながら経済的に発展してきた「工業の町」としての姿を捉えていく。その過程で、経済的発展に関係なさそう



な「緩衝緑地」の存在に気付き、それが造られた理由を探っていく。その際、今までの「店」や「工場」の単元で学んだことを生かして考える。こうすることで、坂出の姿の移り変わりを捉え、現在の坂出の姿に誇りと愛情をもてると考える。以下に単元で取り扱う内容について説明する。

### （１）坂出市の概要

坂出市は、現在人口が約5万2千人の、香川県で5番目の市である。面積は、約92㎢で10番目である。位置としては、香川県のほぼ中央であり、東は高松市、西は丸亀市・宇多津町、南は綾川町、北は瀬戸内海に面し、瀬戸大橋によって岡山県と接続している。香川県の交通の要所と言える場所である。古くから、港も整備され、貿易港をもつ町として栄えてきた。

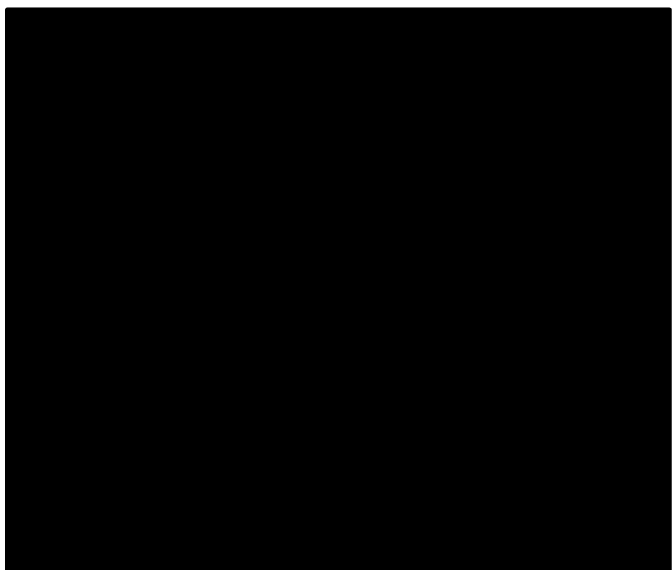
### （２）市役所の働きの学習について

市の変遷について考えるうえで、大切なのが「市役所の働き」である。本学級においては、1学期（5月）に市役所を訪問し、その働きについて学習した。そこでは、市役所が市民のために仕事をしていること、市役所の仕事と自分たちの生活（人生）には、広いつながりがあることを学習した。（詳しくは、本校ホームページ及び、Facebookをご覧ください）その中で、税務課や都市計画課、政策課などの、市の町作りに関わるような人々の存在を学習しておくことで、本単元では、市の様子の移り変わりや市役所の人々の働きのつながりに気付くことができると考える。

### （３）商店街

大正時代に整備された港を通して、さまざまなものが行き交う町になったため、それらの人々をターゲットに商店街が形成されていった。従って、はじめに発達したのは、港から南北に延びる港町商店街であり、その後、東西に延びる商店街が形成されていった。

最盛期は昭和40～50年代であり、当時は240ほどの店があった。現在もシャッターが閉まった状態ではあるが、当時の名残を感じることもできる、県内でも屈指の長さをもつ商店街である。



【昭和40年代の副読本に掲載されている資料】

### （４）塩田

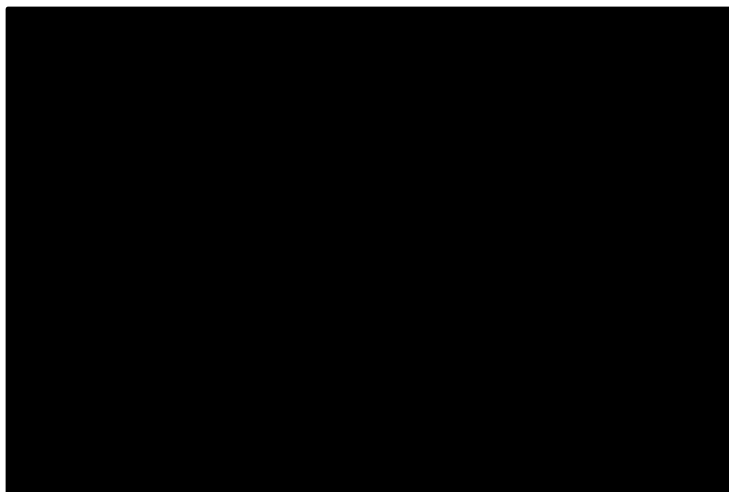
貿易港が整備されたこと、それに伴い商店街が発達したこと、この両方に関わるのが、坂出で昔から行われてきた塩作りである。古くは、浜辺において、土器に海水をくみ、それを煮詰めて水分を飛ばして塩を得てきた。それが、「揚浜式塩田」「入り浜式塩田」へと技術が発達し、塩を大量生産できるようになったため、坂出は全国でも有名な「塩の町」として栄えることとなる。本単元では、坂出が「塩の町」として有名になるきっかけとなった「入り浜式塩田」の成立から、町の移り変わりを見ていくことになる。

製塩方法の違いは、濃い塩水である「かん水」の作り方の違いであり、かん水を得るた

めに、塩水を乾燥させる方法が違うのであって、その後の「かん水」を煮詰めて塩を得る過程については同じである。「揚浜」も「入り浜」も海水を砂地にまき、乾燥させて水分を飛ばし、塩が付着した砂を集めて海水をかけ、濃い海水（かん水）をつくる部分は同じであるが、塩水を散布するまでが違っている。「揚浜」では、海水を散布する砂地（塩田）まで、人が桶に海水をくんで、持ち上げる必要がある。一方で「入り浜」では、塩田の近くまで海から溝を掘ることによって、海水を誘導し、そこから海水をくみ、散布する。人が海水を運ぶ必要のない「入り浜式塩田」は、多くの場所で採用され、日本の製塩業を支える存在となった。

この「入り浜式塩田」は、久米通賢（くめつうけん）によって整備された塩田であり、坂出においては、江戸時代の終わり頃から、昭和の中頃まで存在した。

写真の左右に見える溝から、海水を砂地に散布する。乾いたところで、塩が付着した砂を、真ん中の四角の穴に集め、上から海水をかけることにより、かん水を作るのである。作られたかん水は、釜炊きによって煮詰められ、塩が取り出される。



【入り浜式塩田による製塩】

当時の香川県の製塩業は全国でも有名で、生産量は全国の三分の一を占めていた。中でも坂出は中心的な生産地であった。かん水づくりに適した気候であったことと、広い塩田を作りやすかったことがその理由であろう。こうして生産された塩は、坂出港から関東や北海道など、全国へと送り出されていった。

#### 塩田のその後

長く続いた入り浜式塩田も、より人手をかけずに濃いかん水を作る方法へと変化する。久米通賢が作った入り浜式塩田は濃いかん水を作るために、砂地に海水をまく人、砂を平らにならす人等、「浜人」と呼ばれるたくさんの人手が必要であった。結果として、塩の値段は高くなってしまふ。そこで、安い塩を作るためにも、人手をかけずに濃いかん水を作る必要がある。そのために新しく「流下式塩田」が開発された。これは、傾斜を付けた地面の上に塩水を流したり、高い枝の上から塩水を垂らしたりする過程で、自然に水分を蒸発させ、濃いかん水を作るというものであった。この方法だと、人の手によって海水を散布したり、砂を集めたりする必要がない。こうして塩業は新しい方法に切り替わっていった。しかし、この流下式塩田も長くは続かず、次の製塩方法に変わっていった。

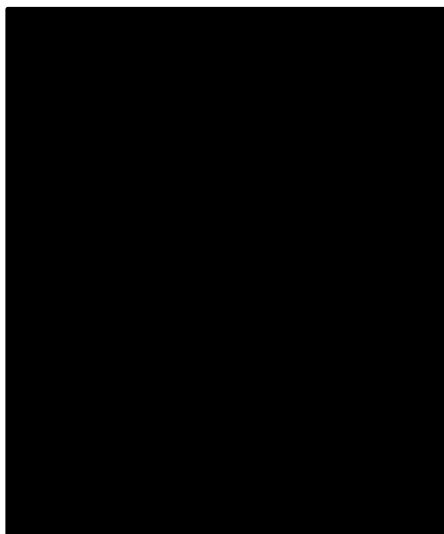
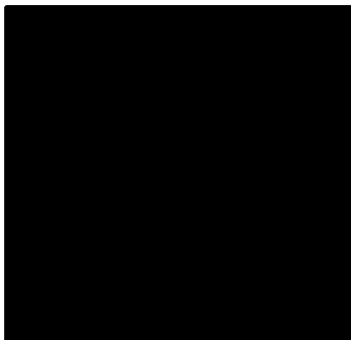
#### （５）塩田跡地と番の州工業団地

塩田は、昭和47年に姿を消す。製塩は、イオン交換膜方式に代わり、工場でかん水が作られるようになったのである。これが、現在も続いている製塩方法である。

使われなくなった塩田は、さまざまに姿を変える。すなわち、住宅地、大型店舗、工場等である。現在の坂出の北部は、もともと塩田であった場所がほとんどである。これらの

塩田跡地を再利用し、坂出の町は経済的に成長したのである。

一方で、塩田跡地の再利用に加え、当時の坂出市は番の州地区の埋め立てに踏み切る。ここは、元々砂州が広がっていた場所で、沙弥島と瀬居島は陸続きではなかった。当時、対岸の水島地区で工業化が進み、それに伴いより大きな船が着港できるよう、港の浚渫工事が行われた。その際に出てきた土砂を利用して、坂出の沿岸から、沙弥島・瀬居島までの砂州が埋め立てられたのである。こうして新しくできた土地に、川崎重工業などの大工場を誘致することによって、坂出は税収を増やすと共に、それまで塩田で働いていた人の働き口を確保しようとしたのである。こうして坂出は、「塩の町」から「工業の町」へと姿を変えていった。



【埋め立てが進む番の州】

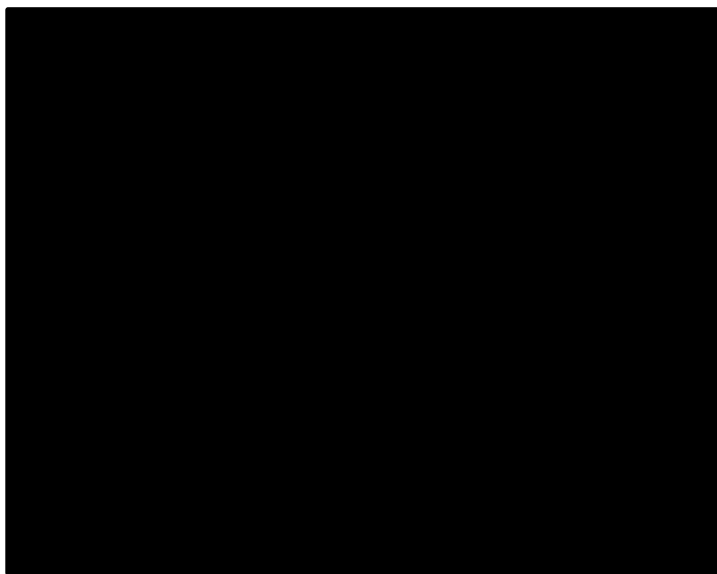
【埋め立ての様子】

#### (6) 緩衝緑地

坂出市には、比較的大きな緩衝緑地が存在する。浜街道と呼ばれる幹線道路沿いに、およそ2 Kmにわたって木が植えられ、所々に公園がある。これは、塩田跡地を再利用する際に、整備された物である。

昭和40～50年代にかけて、坂出では公害問題が起こっていた。塩田跡地の再利用や番の州の埋め立てによってできた土地に大量に建てられた工場によって、大気汚染や騒音問題が起こっていたのである。この時期、市の広報誌には常に「坂出市の公害状況」として特集が組まれており、当時の人々の公害への関心の高さが分かる。

ここには、マツ、ヤマモモ、ウバメガシ、クスノキ等が植林され、中には遊歩道が設けられており、ジョギングや散歩をする市民の姿が見られる。



【整備される緩衝緑地】

#### (7) 町作りに関わってきた人々

坂出には、その発展に関わってきた人物が時代ごとに存在する。これらの人物を取り上げることで、その人の目を通して坂出市の移り変わりを理解できるようにしたいと考えた。しかし、先人の学習ではないので、成し遂げた業績に深入りはせず、どのような思いであったかを考えることにした。

### ■久米通賢（久米栄左衛門）

まず、坂出の礎を築いた人物として、塩田を作った久米通賢が挙げられる。この人物は、先ほど塩田のところでも紹介したが、江戸時代の終わり頃に坂出に塩田を作った人物である。彼の作った塩田は、それまでの塩田と違い、わきに掘られた溝を利用して海水を塩田に散布しやすかったことに加え、雨水を効率よく排出することができた。雨天時は、塩田に雨水がたまり、雨水が乾いてしまうまでかん水づくりができなかったが、溝に雨水を流すことで素早くかん水づくりを再開できるようになった。

彼は、当時の高松藩の財政を立て直すため、坂出に広大な塩田を作ることを提案する。提案に至るまでに、何度も下見を繰り返し、香川県中の海岸を見て回り、かん水づくりに向いている風通しがよく日当たりのいい場所を求めた。そして、香川県の中でも、坂出の浜が塩づくりに適していることを見極めたのである。久米通賢の築いた入浜式塩田は優れたものであったため、「久米式塩田」と称され、その後の塩田づくりの模範となっていくた。



【久米通賢】

### ■鎌田勝太郎

鎌田勝太郎は、「醤油」で有名な鎌田醤油株式会社を成長させた人物である。醤油醸造をしていた鎌田家の長男として生まれ、醤油づくりだけでなく、塩業の振興にも務めた人物である。政界にも進出し、国会議員として明治時代から大正時代まで活躍した。

鎌田勝太郎は、実業家、政治家として香川県の発展に大きく寄与したが、ここでは特に塩業振興と坂出港の拡大に着目したい。

久米通賢が坂出に塩田を作って300年、坂出の塩田は全国に知られる存在であった。その塩業をより活性化させようと、鎌田勝太郎は、坂出で作られた塩を広く全国に流通させようと試みる。そして、坂出と函館の間を結ぶ海運業を興した。この海路を通して、坂出で作られた塩や醤油が北海道へと持ち込まれたのである。海外に関しては、外国塩は日本よりも安かったため、輸出計画は崩れることになる。しかし、安い外国塩に対抗するためにも、坂出の塩業をより大きく、効率的なものにする必要があった。そこで、鎌田勝太郎は、坂出の隣、宇多津にも塩田を開き、より広い土地で効率よく塩づくりをしようと画策したのである。

遠く北海道や海外と交易するためには、大きな船が入港できる大きな港が必要である。坂出には当時、港は存在していたが、小さな船しか入港できない深さしかなかった。そこで、大正10年、鎌田勝太郎らは協力して「坂出港期成同盟」を発足させ、港の大規模化に着手した。こうして大規模化した坂出港は、その後重要港湾に指定され、「港町 坂出」の礎となっていくた。

### ■番正辰雄

番正辰雄は、坂出第10代坂出市長である。市役所で建設課長や助役を務めた後、昭和48年に市長に就任した。それ以来、4期16年にわたり、市長を務め、その間に、林田港を整備、塩田跡地の再開発、番の州埋め立て及び企業誘致に尽力した。さらに瀬戸大橋架橋には、着工から開通まで関わり、まさに現代の坂出市の姿を形作った人物であるといえ



【鎌田勝太郎】

る。数々の事業を成し遂げた番正市長であるが、ここでは、塩田跡地の再開発と番の州埋め立てに着目したい。

番正市長は、塩田跡地を工業地や商業地として再利用すると同時に、番の州の埋め立てによってできた臨海工業地帯から市民の生活環境を守るために緩衝緑地を造成した。

番の州の埋め立て工事の際には、沙弥島や瀬居島周辺の海を漁場としていた地元の漁師たちとの衝突があったようだ。当時、助役だった番正市長は漁業関係者の代表と話し合い、埋め立て工事が順調にできるよう交渉したのである。このように、番正市長が塩田跡地を再開発し、番の州地区を造成し、現在の坂出市の姿が出来上がっていった。

## 5 単元の実際

### (1) 学習意欲への働きかけ

#### ① 海へ広がる坂出年表

江戸時代		明治時代					大正時代		昭和時代					平成時代							
180年前	150	140	130	120	110	100	90	80	70	60	50	40	30	20	10						
東大浜・西大浜の塩田が完成			塩田が広がる	両景橋完成	坂出に初めて鉄道が通る		港が大きくなる	塩田が広がる	商店街が広がる		坂出市になる(人口三万八千人)	港まで鉄道が通る	港が大きくなる	商店街の売り上げが最大になる	坂出市人口最大(六万七千人)	沙弥島が番の州埋立地とつながる	工場が塩づくりが始まる	坂出市の塩田がなくなる	瀬戸大橋ができる	坂出駅が今の建物になる	現在(人口五万三千人)

3年生は年表を見るのも初めてである。そこで、社会科の時間外に小学校の歴史年表を紹介し、身近にあることを伝える。

授業で使う年表は、読み取りやすさを考慮し、大まかな時代区分と、「今から〇年前」という表し方で統一することにした。また、内容も厳選し、坂出の移り変わりを示す内容のみにし、子どもたちにも分かるように記述を改めた。また、昔の商店街や埋め立ての様子についての写真を学習ごとに付け加えていくことで、具体的にその時代の様子をつかめるようにしたい。

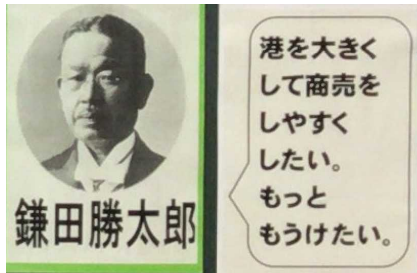
#### ② 簡単地図



坂出市と一口にいっても、さまざまな部分がある。それらすべての移り変わりを考えるには、あまりに複雑である。海沿いの移り変わりと山際の移り変わりは違うからだ。そこで、本単元においては、小学校がある海沿いの部分に焦点を当てて考えていく。そこが坂出市においては人口が集中している部分で、人々が「坂出市」と聞いたときに最も想像しやすい部分でもある。

そこで、使用する地図もこの部分に限定し、町名や道も主要なもの以外はなるべく省き、見やすいものとした。3年生の子どもたちが坂出市の移り変わりを考えていくうえで、必要のないものを省くことで、どの子も見やすい地図になり、考える時に手がかりにしやすくなる。また、工場や道路、家の部分について大まかに色分けすることで、坂出の海沿いは、北から工場、お店、太い道路、住宅地と配置されていることに気付けるようにしたい。

③ 人の思いカード



町の移り変わりを考えるうえで、人の思いを手がかりにしていきたい。本単元においては、広い塩田を作った人物として久米通賢を、商店街の発展に関係した人物として鎌田勝太郎を、坂出市を計画的に作った人物として番正辰雄をそれぞれ取り上げる。彼らの思いについて話し合うことで、

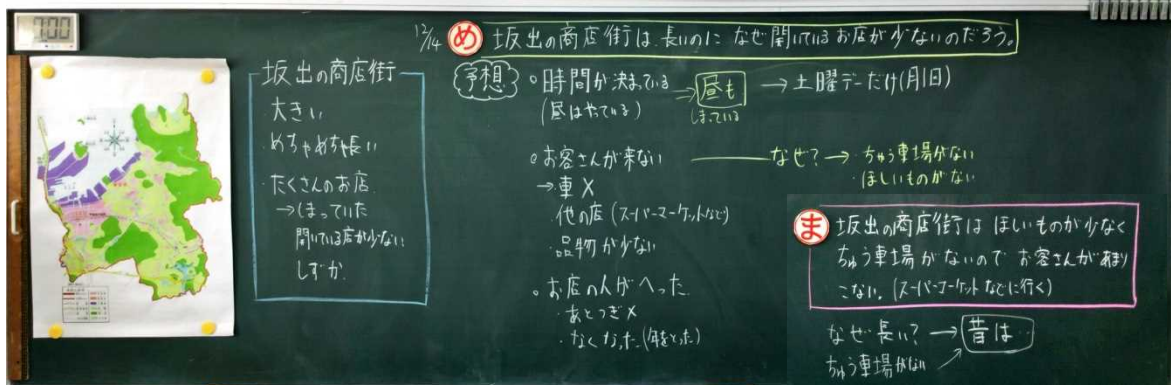
「坂出の町を大きくしよう」や、「もっと塩を売ってもうけるために、港を大きくしよう」といった思いが、広大な塩田や港を作ってきたことに気づき、人の思いと土地利用され方の違いに深い関係があることを捉えさせたい。

また、時代ごとに人の思いが変わっており、そのような思いの違いによって町の様子が変わっていることに気付けるのではないかと考える。

(2) 本時までの授業の流れ

■ 第一次 坂出市の商店街の今と昔を比べ、昔にぎやかだった理由を考えよう

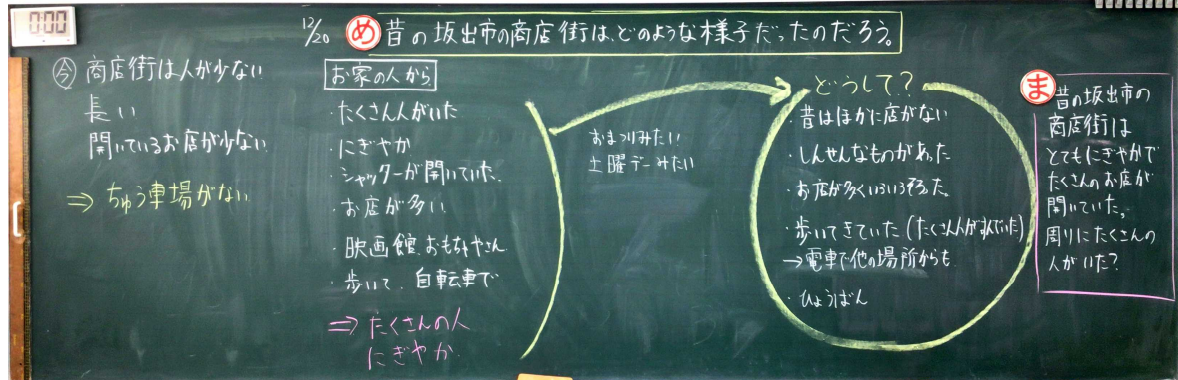
① 「坂出の商店街は長いのに、なぜ空いているお店が少ないのだろう」



現在の商店街について、これまでに利用したことや、通った経験を想起させながら、改めて場所と道の長さについて紹介すると、とても長いことに気づき、「すごいな」という感想が聞かれた。しかし、実際に歩いた時の経験から、「たくさんお店があったが、ほとんどのお店が閉まっており静かであった」という意見が出された。そこで、なぜそのような状況になっているかについて話し合い、「お店で働く人」の単元において学習したことを生かしながら、「お客さんが来ないのは、自動車で行きにくいからだ」等の意見が出され、ほとんどの子どもが納得した。

それでも商店街が長いことは説明できないため、「昔に何かあったのではないか」「昔はどうだったのか」という問いが生まれ、次時へとつないだ。

② 「昔の坂出市の商店街はどのような様子だったのだろう」



前時の復習から、商店街には駐車場がないため、今は行きにくくなってしまっていることを確認した後、前時の振り返りで出てきた「昔はどうだったのか」という問いを基に学習を進めていった。子どもたちは家庭で聞いてきたことを紹介し合い、さらに、昔の商店街の写真や映像を見ることで、昔の商店街がにぎわっていた様子を捉えていった。

その後、振り返りにおいて、「なぜそんなにたくさんの方がいたのか」という疑問が出され、次時につないでいった。

③④ 「なぜ、昔の商店街はにぎやかだったのだろう」

この商店街は、昭和 30 年くらい、今から 60 年くらい前はとてもたくさんの方にぎわっていました。

お店は、全部で 240 店あり、近くに住む人や、周りの町から買い物に来るお客さんでにぎわっていました。

近くに住んでいた人というのは、塩田ではたらいていた人たちです。

昔の坂出市の海そばには、塩をつくるために広い塩田があり、たくさんの方がはたらいていました。

できた塩を運ぶために、港も大きくなりました。

**【商店街の河井さん】**

まず、昔の商店街が賑やかであった理由を予想した。そして、「たくさんのお店があったから」や「新鮮な物がたくさんあったのだ」等と、前単元「店で働く人」での学習内容を使って考えていった。そして、「たくさんのお店があったからたくさん人が集まっていたのだろう」という意見を全体で共有した。その後、商店街の人の話から、約 240 店もの店があったことを知り、「やはりたくさんのお店があったからたくさん人がいたのだな」と納得していった。

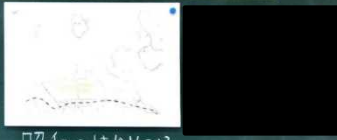
次に、商店街の写真や駐車場が少ないという事実から、「昔の人たちは商店街に徒歩や自転車で来ていたのだろう」と予想した子どもたちの意見を取り上げ、「どんな人たちが商店街に来ていたのかについて話し合った。その後、商店街の人の話から、「商店街に来ていた人の多くは、近くに住んでいた塩田で働いていた人たちだ」ということを知った。その後、振り返りにおいて、「塩田とは何か」「塩はどうやってつくるのか」という疑問が出された。



⑤⑥⑦ 「坂出市の塩作りについて調べよう」

⑤ め 坂出では、いつから、どこで塩づくりをしていたのだろう。

坂出の塩づくり  
→ 180年より前から江戸時代  
→ 北のほう 港、海の近く 広い



昭和のはじめごろ


ま 180年前に塩田ができた。海の近くで塩づくりがされていた。どうやって塩をつくるのか、どうして塩田はあんなにたかく、つく本塩はどこへ?

江戸時代	明治時代	大正時代	昭和時代	平成時代	
180年前 坂出の港が今の位置に 東大浜・西大浜の塩田が完成	150	140 塩田が広がる 両長橋完成	120 坂出に初めて鉄道が通る 110 港が大きくなる 100 塩田が広がる 90 商店街が広がる	80 坂出市になる(人口三万八千人) 70 港が大きくなる 60 坂出市人口最大(六万七千人) 50 商店街の売り上げが最大になる 40 沙弥島が藩の州埋立地とつながる 30 坂出市の塩田がなくなる 工場が増え始める 坂出の塩田がなくなる	20 坂出駅が今の建物になる 10 現在(人口五万三千人)

まず、「いつから、どこで塩づくりをしていたのか」を調べていった。子どもたちは、当時の地図や年表等の資料から、坂出において、塩作りは江戸時代よりも昔から、海の近くである、坂出市の北の方で行われていたことを認識していった。そして、江戸時代に大きな塩田を作った久米通賢を紹介し、その思いを考えていった。その後、「どうやって塩をつくるのか」という疑問が出された。

⑥ め どうやってしおをつくらっていたのだろう。

坂出では江戸時代からしおづくり



予想 海からしおをとる  
海から海水をとる  
→ 水としおに分ける  
海水をかかす  
塩田でかかす? → かん水

1 塩田に海水をまく。  
2 すなを集める → 塩田で  
しおをかまこいては  
3 海水をかける  
4 かん水をたく(火)  
しおだけが残る  
たくしおの人で  
重いなあ あついなあ

ま しおづくりは海水からたくしおの人でする  
海水を火でたく  
だから海の近く  
できるまで くわしく  
塩田はない?  
この教は?


前時の復習から、「どうやって塩を作っていたのだろう」というめあてを設定した後、予想の時間を取った。子どもたちは、生活経験と塩田が海沿いにあったという事実をつなげて、「海水を乾かして塩を作っていたのではないか」と予想していった。そこで、海水が乾くと濃い塩水になり、それを「かん水」と呼ぶことを知らせ、写真や映像資料を使って、塩田による塩作りについて教えた。子どもたちは、塩田で働く人たちの大変さを認識すると同時に、塩を作るためにはたくさんの人が必要であることを理解し、商店街の近くにたくさんの人がいた理由とつながることができた。その後、「塩田は広い場所にあるはずだけど、今はない」や「作られた塩はどうなるのか」といった疑問が出された。

⑦ め つくられた塩はどうなっていたのだろう。

塩の売り方  
塩田でつく  
たくしおの人

予想 けんさいで売られる  
ためておく  
お店に行く  
→ 日本中にとけられる  
昔はない、せと大橋はない  
船で運んでいた  
いくつもの船で

塩をこんだ船



港へしおを運ぶ  
大きな港が必要

ま つくられたしおは大きな港から全国へ運ばれ、坂出の港を大きくした。  
塩田がない?  
舟の数は?  
いじ?

船をふかして  
商売やす  
たくしおを運ぶ  
売る  
→ もうかる  
ちよ  
もうけたい

鏡田勝太郎  
が球サマツウ

前時の復習から、全国の3分の1の塩が生産される「塩の町」であったことを確認し、大量に作られた塩がどうなるのかについて話し合った。前単元の「農地で働く人」でのにんじんの出荷の様子を想起しながら、「日本中のお店で売られるのではないか」という予想が出された。しかし、当時は今のようにトラックがないことから、船で運んでいたのではないかと意見が出され、当時の船を紹介した。たくさんの塩を運ぶためにたくさんの船が必要であり、そのために大きな港が必要であると考えた子どもたちは、年表の中から「港が大きくなった」という事実を見つける。そこで、港を大きくした人物として鎌田勝太郎を紹介し、その思いを考えさせた。子どもたちは、「船を増やして、たくさん塩を売ろう」「もっともうけたい」と思いを考えていった。その後、「たくさんの塩を作っていた広大な塩田は今はない」という疑問を次の時間へとつないでいった。

## ■第二次 塩田跡地の再利用について考えよう

### ⑧ 昔塩田だったところは、どうなったのだろう

⑧ 昔塩田だったところは、どうなったのだろう

塩づくり  
→工場がよほど  
塩田なくな  
40年前

工場 → 北のほう 海の手は  
かたまっている

田や畑

緑地 → 道路が太い

家 → 古い家が多い

太い道 → まっすぐ、かやが  
人が  
たかか

市役所の人たち  
みなと課  
建設課  
都市計画課  
番正市長

市役所の  
番正市長が塩田だ  
ところを工場や太い道路  
にした。  
どうして「まっすぐ」をつけたのか  
緑地

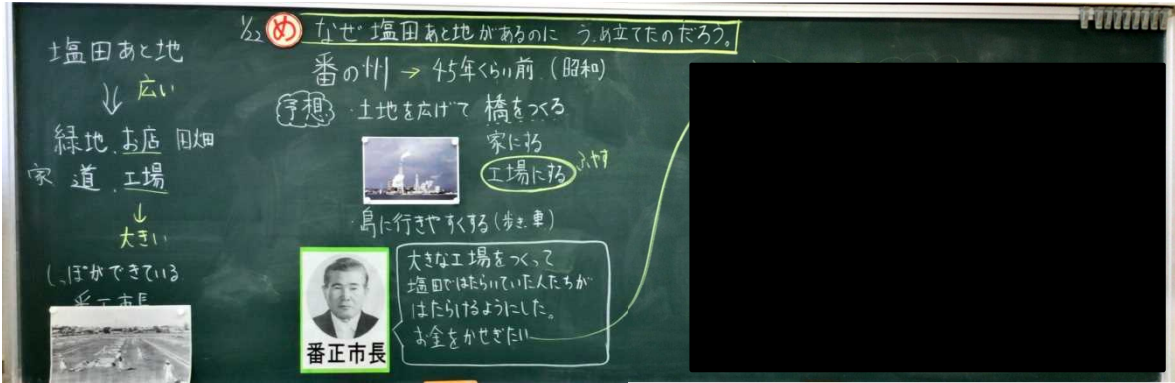
前時の復習から、「塩田跡地はどうなったのか」とめあてが出された。まず、年表から、40年前に塩田はなくなっているという事実を見つけ出し、自分たちの経験からも、塩田は今はないことを確認した。その後、現在の地図や航空写真を使って、塩田跡地が何になっているかを、白地図に色分けしていった。

その後、塩田跡地が何になったかを問うと、北の方が工場になっていること、南の方は住宅地、太い道路になっているという意見が出された。工場と家が分かれていることや、道がまっすぐであることと、前単元「市役所の仕事」とつないで考え、市役所の人たちが計画的に町を作っていたのだと認識していった。

振り返りでは、地図を見て番の州地区が埋め立てられていることに気付いた子どもから、「どうしてしっぽを作ったのか」（子どもたちは坂出市を猫の形に見立て、番の州地区をしっぽの部分、と呼んでいる）という疑問が出された。また、航空写真を見て、長い緑地があることに気付いた子どもから、「この緑地はなぜここにあるのか」という疑問が出された。

単元計画には明記していないが、この授業の後、「実際に塩田跡地を歩いてみよう」と意見が出されたので、全員で塩田跡地を歩いて確かめていった。塩田跡地が地図で見たようになっていることを確認した後、緩衝緑地も歩き、「静かだ」「空気がおいしい」等の感想が聞かれた。

⑨ なぜ、塩田跡地があるのに埋め立てをしたのだろう

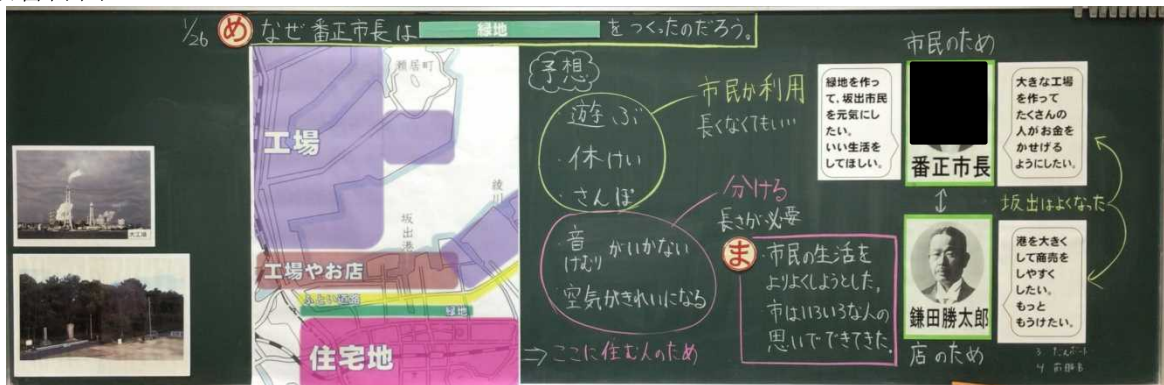


前時の振り返りから、めあてを設定した。まず、年表を使って、番の州地区がいつできたのかを確認した。その後、地図や航空写真を使って、埋め立てられた場所が何になっているかを調べた。予想はいくつか出たが、すべてが工場になっていることを確認し、それ以外のものは塩田跡地にできていることを確認した。そして、前の時間に「はてな」として「塩田で働いていた人たちはどうなったのだろう」と考えていた子どもから、それらの人々が工場で働くようになったのではないかと意見が出された。それに対し、「工場はそんなに働く人が必要ない」という意見が出され、これらを聞いていた児童から、「だからたくさん工場が必要だったのだ」とまとめた意見が述べられた。ここで、当時の市長である番正市長がどういう思いで工場を作ったのかについて話し合った。「お金を稼ぎたい」という意見が出されたため、鎌田勝太郎と比べ、「鎌田さんと同じか」「そのお金が誰のものになるのか」と問い、租税の働きを説明した。

⑩ なぜ、番正市長は緑地をつくったのだろう

(本時)

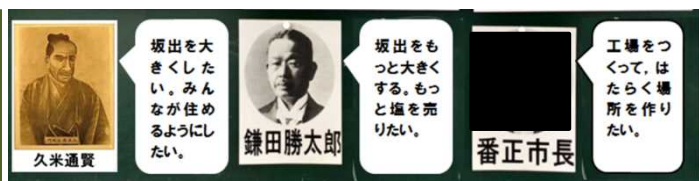
板書計画

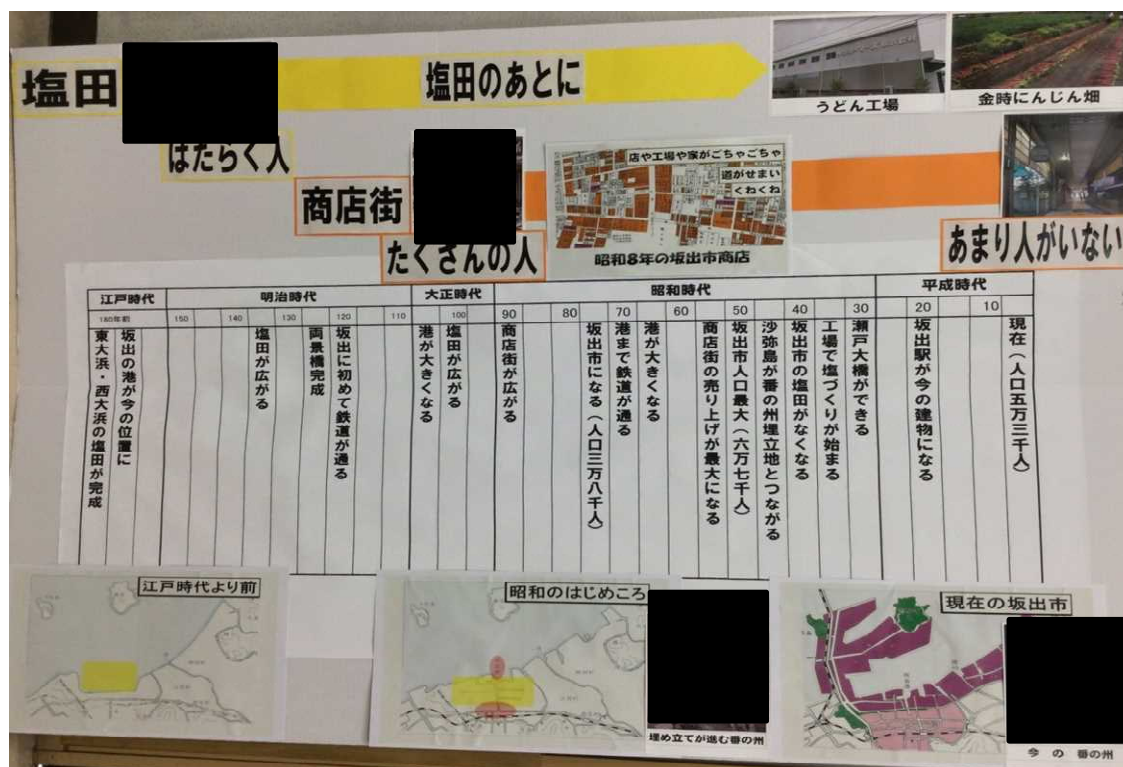


補助資料 (租税の働き)



補助資料 (人の思いカード)





### 参考文献

- 島田恭平, 『淡翁』, 鎌田共済会, 1942年
- 小川一太郎, 『淡翁鎌田勝太郎』, 坂出文化協会, 1983年
- 番正辰雄顕彰会, 『番正辰雄 追想録』, 番正辰雄顕彰会, 1991年
- 四国新聞社編, 『新瀬戸内海論 連鎖の崩壊』, 四国新聞社, 2000年
- 川畑迪, 『ふるさとの思い出 写真集 明治大正昭和 坂出』, 国書刊行会, 1982年
- 伊丹正博, 『香川県における廃止塩田転用と地域開発』, 香川大学経済学部, 1981年
- 坂出市史編纂所, 『坂出市史研究 第二号』, 坂出市史編纂所, 2016年
- 日本たばこ産業株式会社高松塩業センター, 『香川の塩業の歩み:塩づくりの歴史』, 日本たばこ産業, 1991年
- 平岡昭利, 『中国・四国 地図で読む百年』, 古今書院, 1999年
- 坂出市小学校社会科研究会編, 『海へのびる坂出』, 1969年, 1973改訂版
- 坂出市小学校社会科研究会編, 『瀬戸大橋の町坂出』, 1990年
- 坂出市読み物資料編集委員会, 『志をはぐくむ』, 2013年
- 坂出市ふるさと発見部会, 『子ども風土記「坂出の歴史」』, 1991年
- 坂出市立西部小学校, 『ふるさと西部の昔を訪ねる』, 1996年
- オンライン文献
  - 重見之雄, 『流下式塩田への転換と塩業者の対応—特に坂出・宇多津塩田を中心として—』, J-STAGE, 1972年（最終閲覧日 2017年）
  - 山口武良, 『坂出市の発達史的考察と水についての二、三の問題』 J-STAGE, 1964年（最終閲覧日 2017年）
  - 塩業資料室, 『香川県下における最近の塩業整備について』, 香川大学学術情報リポジトリ, 1973年（最終閲覧日 2017年）
  - 中山博道, 『坂出港の「みなと文化」』, みなと文化研究事業, 2017年（最終閲覧日 2017年）